

東福寺は鎌倉時代創建の禅寺である、重森は禅寺にふさわしい質実剛健な庭を作った。方丈南庭は約5.5mの横石を基本とした四神仙島と白砂により荒海を表現している。一方正面右側には苔に覆われた築山で五山を表し、巨石群と対比させ厳しさを和らげている。

聖一国師と唐楓

円璽辨円（えんじべんえん）といい、三井園城寺の学徒として天台の教学を修め、後に栄西の高弟行勇・栄朝について禅を学んだ。1235年に34歳で宋に渡り、在宋6年、無準師範（ぶしゅんしばん、1178年～1249年）の法を嗣ぎ、1241年に帰朝した。1243年に藤原（九条）道家に迎えられて東福寺の開山となった。また当山は紅葉で有名であるが、聖一国師が宋から唐楓を持ち帰り、境内に植えたことから聖なる木となった。

感動を与える庭はテーマ性・抽象性・立体造形性がある

テーマ性

庭園を作る上で最も重要なことは構想力であると思う。即ち庭園の置かれた環境に応じたテーマの選択である。と言うのは庭を作る条件で理想的な場所があり、最高の石があり、潤沢な資金があっても、作られた庭が傑作になるとは限らない。

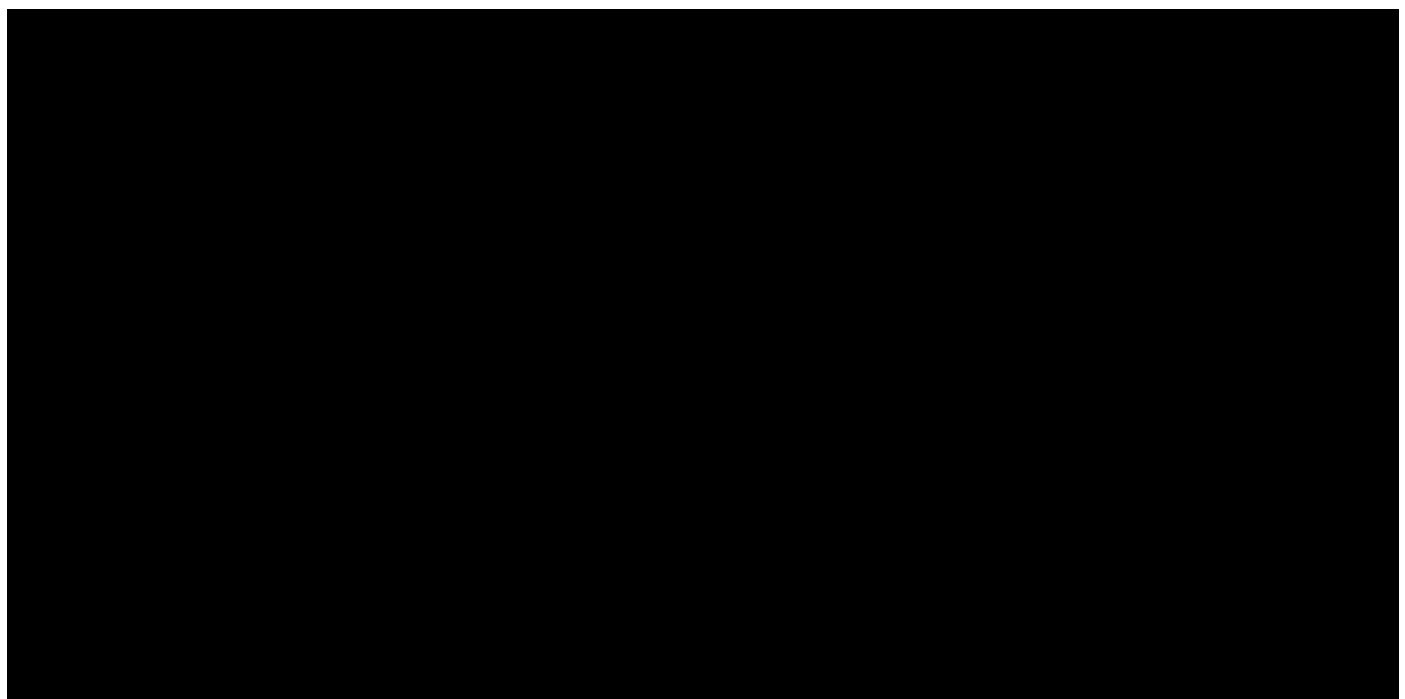
テーマは具体的過ぎると、石組みが説明的になってしまうので、抽象的な宗教説話がテーマとして好まれるゆえである。当寺においては「八相の庭」といわれ、釈迦の生涯の八つの重要な出来事に因んでいる。南庭は左側より「方丈」「蓬莱」「瀛州」「壺梁」の四神仙島と「五山」をテーマとし、西庭は「井田市松」を、東庭は「北斗七星」に、北庭は苔と石による小市松のデザインである。なお、東庭の「北斗七星」、北庭の「小市松」は廃物の石を利用した。即ち「北斗七星」は東司(便所)の石柱利用で、「小市松」は勅旨門から方丈にいたる敷石を利用した。余材の利用は寺からの要望であるが、禅宗では一切を捨てぬ精神による。

抽象性

上記テーマにちなんで、象徴的な造形を象っている。特に四神仙島は稜角の厳しい石で組まれている。中でも向かって左側の「方丈」「蓬莱」「瀛州」の三島には約5.5mの横石が使われている。この手法は古典にもほとんど例が無く、重森の独創と言える。また、「蓬莱」の立石は奇怪な形をしているが、仙人の住む幻想の世界が揺らいでいる様を表している、と考えられる。向かって右側の五山は禅宗の五山文化を象徴している。

立体造形性

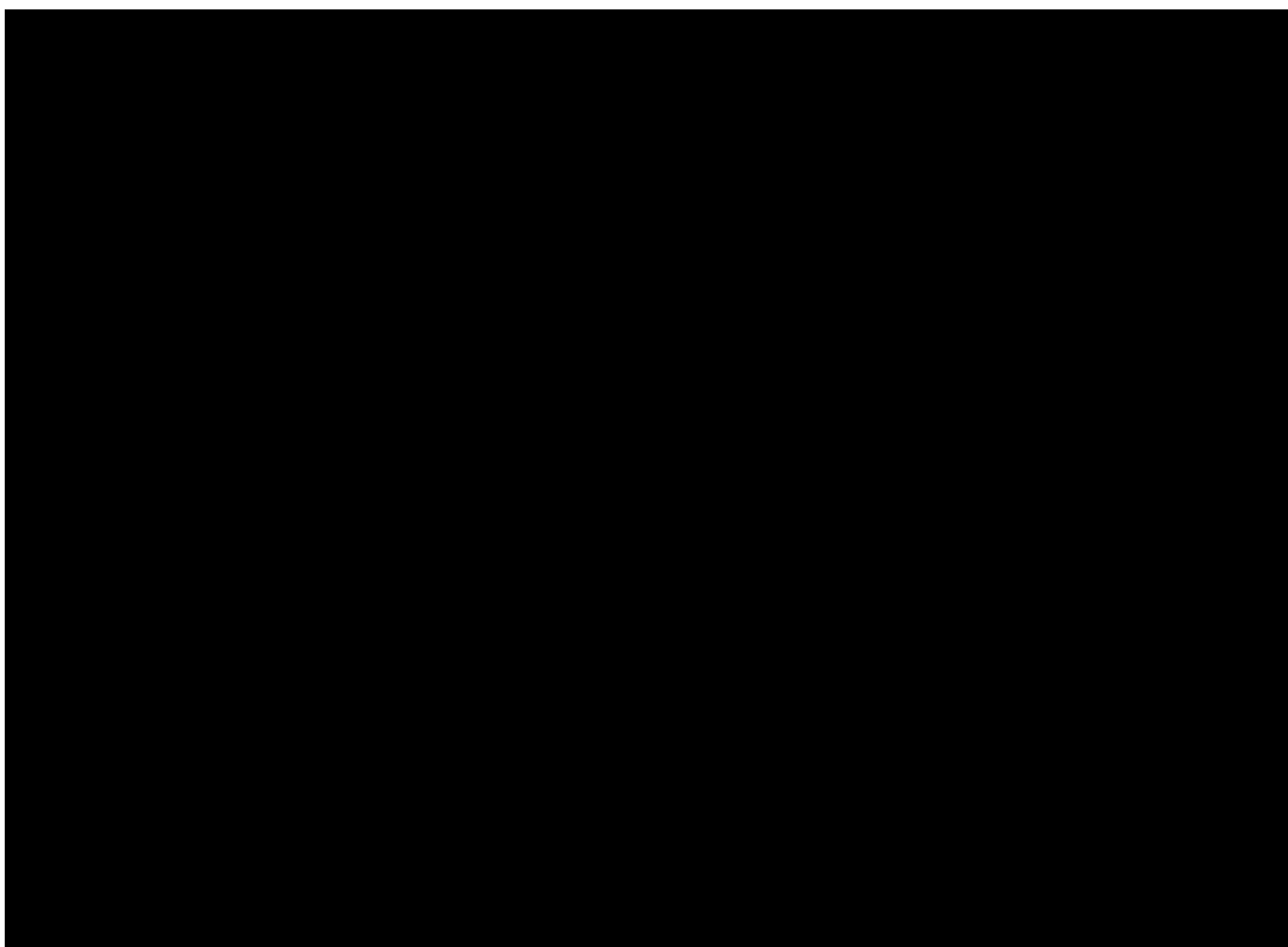
- ・土塀が3mを越すために、伏石を使うことによって堅石の大きさを目立たせる手法を駆使した。
 - ・蓬莱島(左から二番目の石柱群)の立石は傾斜させ緊張を醸し出している
 - ・「瀛州」(左から三番目の石柱群)の横石は全体が沈んでいるのは、神仙島が大海で揺らいでいる様(蜃気楼)。
 - ・海洋に浮かぶ神仙島の造形に護岸を入れなかったため、石組みは芸術性本位で組むことが可能になった。
- (もし、この造形にさらに護岸石組みを入れたならば、煩わしくなり、神秘性を失うことになる。なお、この手法は金地院が原点)



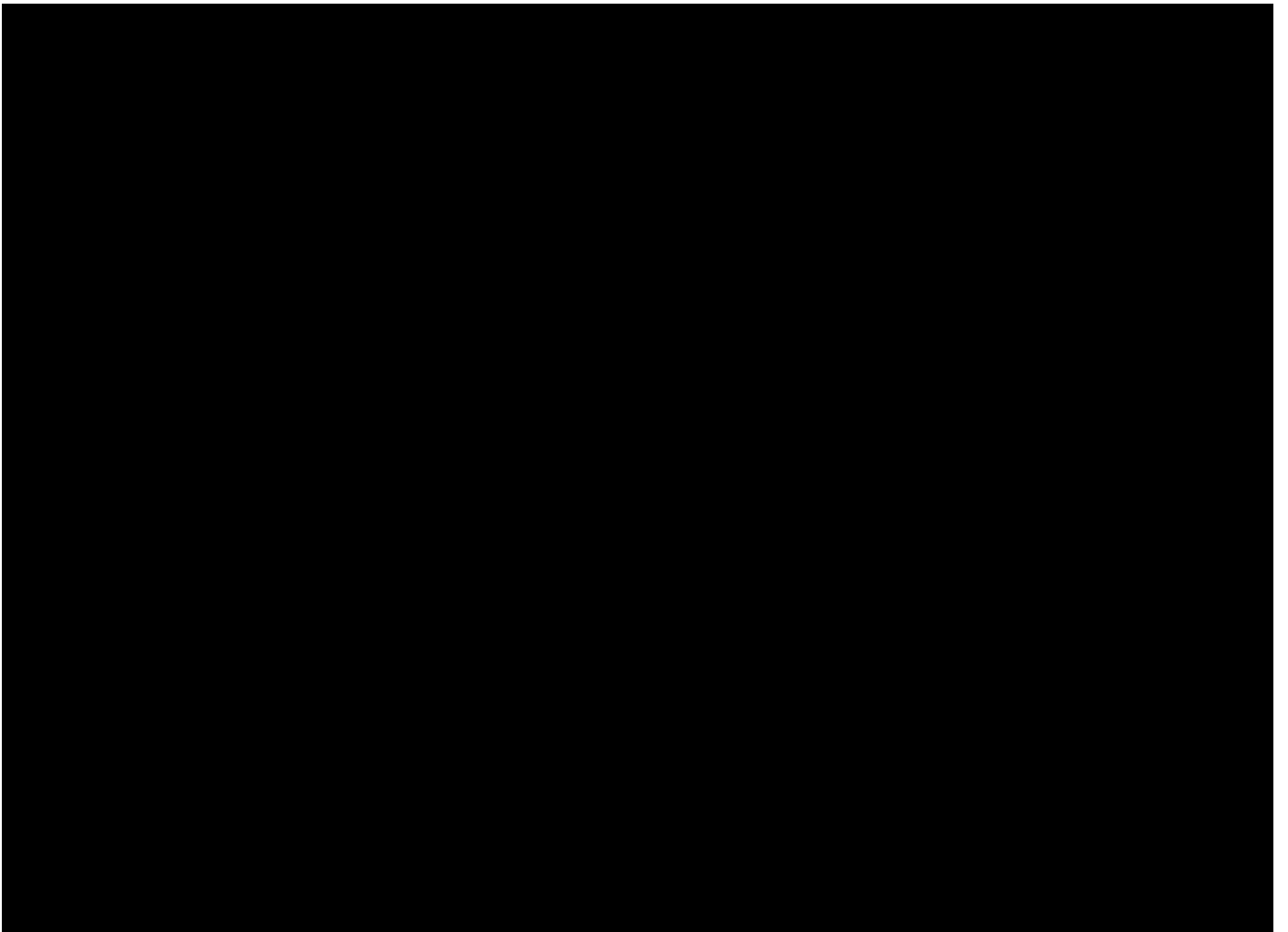
南庭：横に伏せた石は立石を強調するために、重森の独創で過去に例を見ない。左側より「方丈」「蓬莱」「瀛州」の三神仙島



南庭「八相の庭」:実質的な処女作にして代表作の東福寺本坊庭園。左側の穴のあいた怪石は蓬莱山を象徴している。

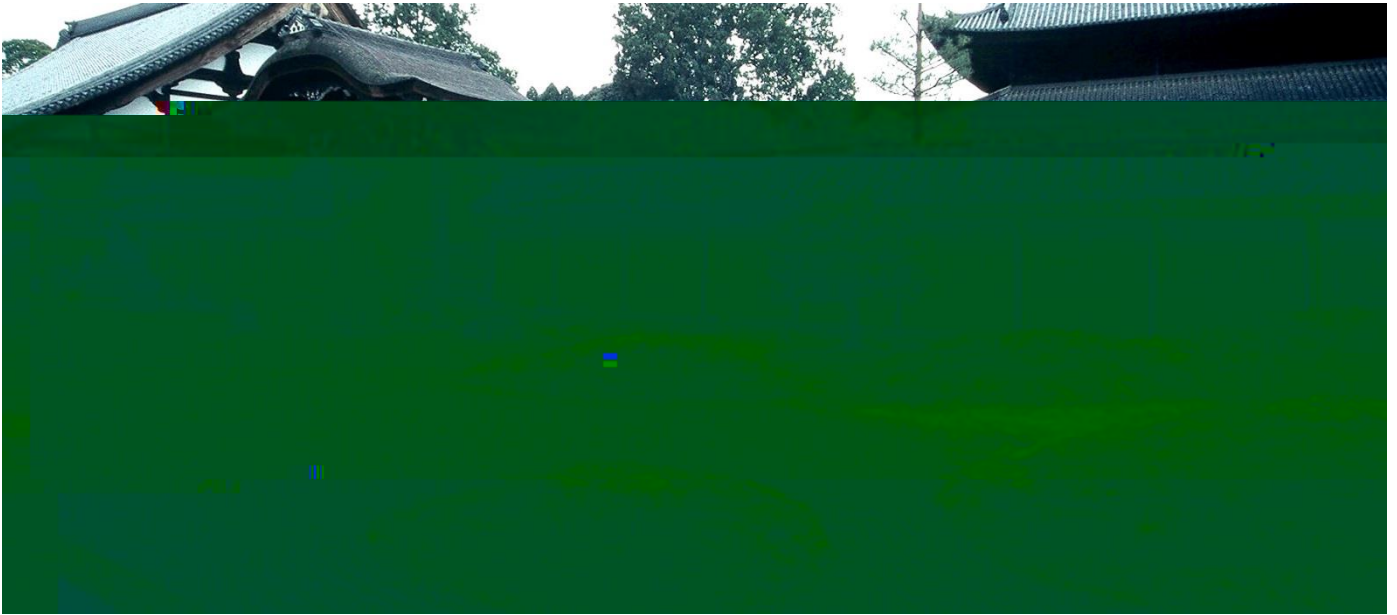


東庭「北斗七星」:北斗七星を象っている。石柱は旧東司の石を活用



45 Tohfuku-ji Temple 2 昭和14年 京都市東山区本町15-775 電話:075-561-0087

138Pの東福寺は平庭式枯山水の系譜の例を示したが、ここでは幾何学模様、グラフィックな造形と色彩の例を示す。



南庭「八相の庭」：苔地の築山は五山を象徴するのであるが、その上に画面を切り裂くような斜線は自然には無い人工の造形である。これぞ超自然の造形で、これによりこの庭は芸術に昇華された。

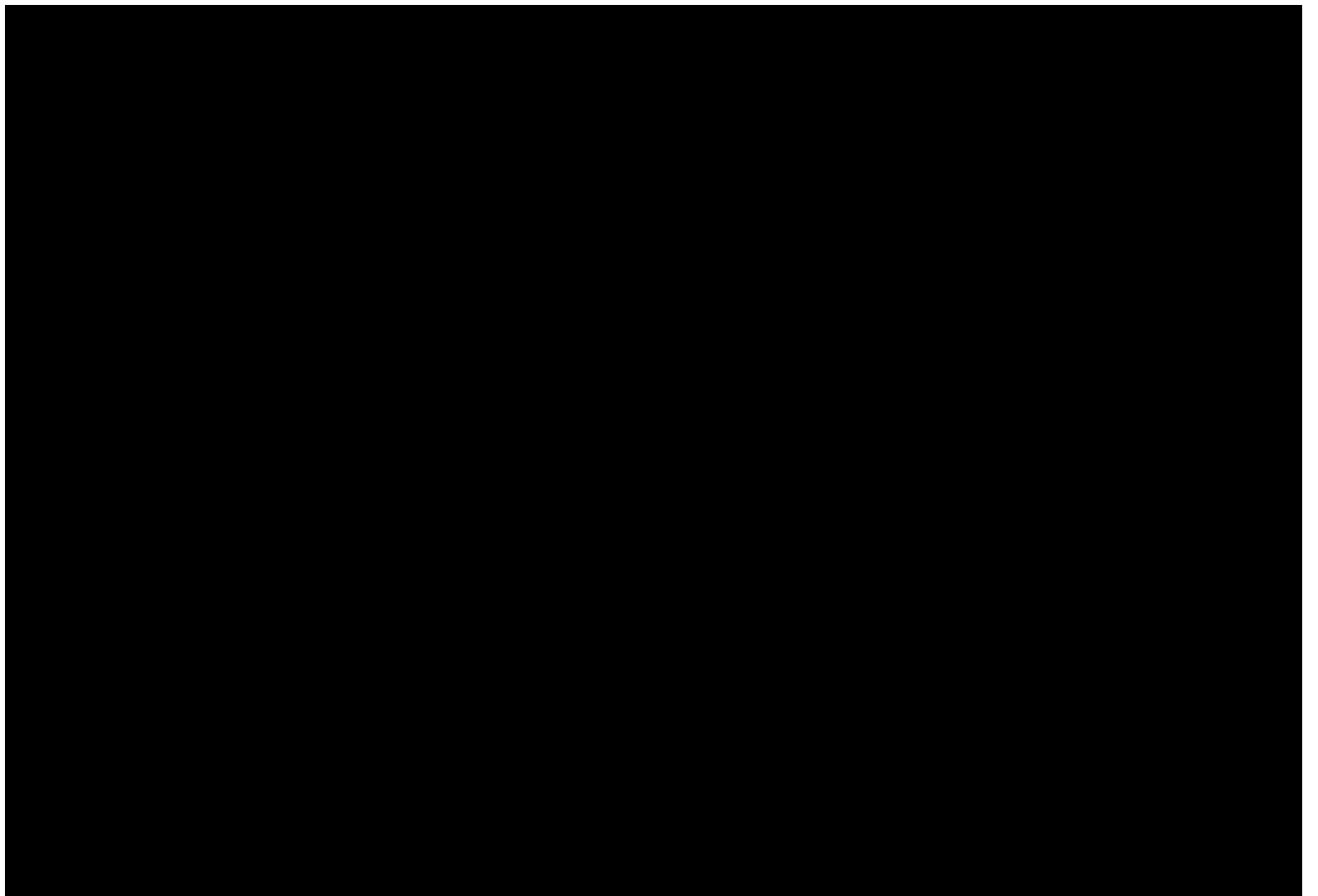
北庭「小市松の庭」：苔地の州浜が造形されていた。



同上：現状



西側「井田の庭」:設計図:蔓石の造形が目を引くが、さらに白砂とツツジの織り成す色彩に注目



同上:この造形は白砂のレベルとツツジのレベルを同じにして、その色彩の対比を強調した

上記写真の出典は『庭の美』 重森三玲著 第一芸文社 (昭和17年発行) 146Pより)

「…庭に花を用いる場合、花として鑑賞する場合と、景として鑑賞する場合と、色彩だけとして鑑賞する場合がある。前二者は普通従来とてもザラに用いられてきたことであるが、色彩だけとして用いられた例を識らない。そこで先年私が、東福寺の方丈庭園設計にあたって、西庭に蔓石を入れ、一を白砂に、一をサツキの小刈込とした。これはサツキの花を愛したのではなく、その色だけを愛する行き方であって、井田市松模様としたのであった。ここではサツキを蔓石一ぱいに刈り込むことにしているから、花のない季節には青と白、花が咲くと赤と白の景観が出来るのである。色だけの対象を作意に入れたことはちょっと面白い点である。斯様なことも、今後の日本庭園では試みる必要があり、そこに日本庭園の新しい前途がある。」